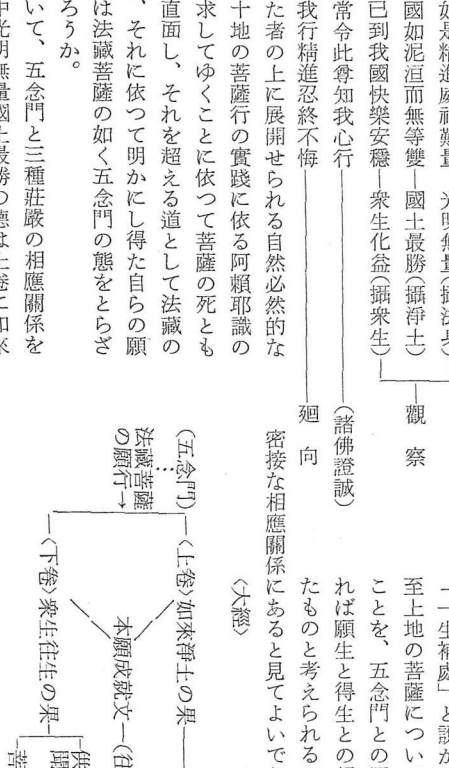
詣世自在王如來所稽首佛足右繞三帀長跪合掌――――――――――――――――――――禮　拜
光顏巍巍威神無極……如來容顏超世無倫―佛の身業―┐
正覺大音響流十方　　―佛の口業―――――――――――――――――――――――――讃　嘆
戒聞精進三昧智慧……無明欲怒世尊永無―佛の意業―┘
人雄獅子神德無量……光明威相震動大千――――――――――――――――――（結讃）
願我作佛齊聖法王……不如求道堅正不退――――――――――――――――――作　願
譬如恒沙諸佛世界……如是精進威神難量―光明無量（攝法身）―┐
令我作佛國土第一……國如泥洹而無等雙―國土最勝（攝淨土）―┤
我當哀愍度脫一切……已到我國快樂安穩―衆生化益（攝衆生）―┘―――――――――――――――――――――――――――――觀　察
幸佛信明是我眞證……常令此尊知我心行――――――――――――――――――（諸佛證誠）
假令身止諸苦毒中……我行精進忍終不悔――――――――――――――――――廻　向

五念門は師教に遇い得た者の上に展開せられる自然必然的な行であり、恐らく世親は十地の菩薩行の實踐に依る阿賴耶識の轉依という根本問題を追求してゆくことに依つて菩薩の死とも呼ばれる七地沈空の難に直面し、それを超える道として法藏の願心に觸れたものであり、それに依つて明かにし得た自らの願生心を表白せる時、それは法藏菩薩の如く五念門の態をとらざるを得なかつたのでなかろうか。

吾々はこの嘆佛偈において、五念門と三種莊嚴の相應關係を見出すのであるが、その中光明無量國土最勝の德は上卷に如來淨土の果として、衆生化益の德は下卷に衆生往生の果として詳說せられ、世親はそれを攝論の十八圓淨等に依つて二十九種莊嚴に要約せられたものと思われる。

論の三種莊嚴の中、その中核をなすものは不虛作住持功德であるが、それは經の本願成就文更には往覲偈の「其佛本願力」の文に相應するものでありそこから分相的に展開せられた菩薩莊嚴は、經に衆生往生の果として說かれた、補處の菩薩に依る供養諸佛の德を開示せられたものであり、善巧攝化章以下は經に菩薩の說法の德として解說せられたものに相應すると考えられる。そして五功德門は、經に「一生補處」と說かれ、論に未證淨心と淨心乃至上地の菩薩について「畢竟得證」と示されたことを、五念門との因果關係において、換言すれば願生と得生との相應關係において明かされたものと考えられるから、經と論とは次の如き密接な相應關係にあると見てよいであろう。



教行信證後序期引用の華嚴經偈について

山田亮賢

『御本書』の後序結文は『華嚴經』の一偈を以て筆が擱かれ

ている。宗祖畢生の主著『御本書』の結びの文が『華嚴經』の一偈を以てせられたことは、そこに自ら特別な理由と感懷があつたことであろう。從來一般には『往生要集』の結文を傳承せられたと解せられているが、それは一應拒み得ないことと思われる。しかし、宗祖は『往生要集』より受けつつ、この一偈を以て代表せられる『華嚴經』の『經』文そのものを背景として顧慮せられていたのではなかろうか。

後序には「如二華嚴經偈一云一　若有下見二菩薩　修二行一種種行一起二善不善心一上　菩薩皆攝取」と新譯「八十華嚴」の文が用いられている。この偈を他譯と對照すれば大體大差なく、大同小異である。ただ舊譯「六十華嚴」は最初の一句が「我見樂修行」となつており、この「我」の語が他譯には見られないまた第三句が「歡喜心無量」とあつて、他譯の「起善不善心」と異なつている。結論的には「菩薩皆攝取」の意味において同じであるが、御引用の新譯の方が意味を明了に知ることが出來る。更に「四十華嚴」では、五言が七言の句に變化し、第一句が「若有衆生見菩薩」となつて、「衆生」の語が加えられ、それが主語になつていることによつて、一層意味が汲みとり易くなつている。何れにしても廣大な菩薩心、即ち具體的には普賢の化他の行心を表現していることは何れの譯も同樣である。

『華嚴經』におけるこの一偈の出所は「入法界品」第四十一善知識瞿波女が善財童子の問いに答えた最後の重頌の最初の一偈である。この瞿波善知識は女性であり、釋女である。佛妃が善知識として登場したことは、次の善知識佛母摩耶と共にこの『經』の特殊な意圖あることを示しているようである。しかし瞿波善知識に關しては、後に現れる彌勒菩薩のそれと共に、「入法界品」中、最も長文詳細を盡している。この善知識に問われた課題は「云何が菩薩は生死の中に遊びて、衆生を教化するや」ということである。そこに生死海中の衆生の善、不善心が委曲を盡して究明せられてあるを見る。その意圖は明かに衆生海中に入つて衆生を知ることであり、そこから衆生を攝取する普賢の行心を說くことである。宗祖が『華嚴經』特に「入法界品」に親炙せられたことは、『御本書』御引用の他の四文からも察知せられることであり、また『和讃』『末燈鈔』等からも窺い知ることが出來る。而してその根本的御關心は、普賢の行心、直接的には「開化一切衆生」ということにあつたと思われる。

『御本書』後序の結文において强調せられた「信順爲因疑謗爲レ緣」は、宗祖の平素の御持言でもあつたと言われている。殊に化他の實際上からは、「疑謗爲緣」こそ重要である。『往生要集』に引用せられた『華嚴經』の偈に次ぐ源信の「當レ知生レ謗亦是結緣」の文に特別な感銘を懷かれたことと思われる。宗祖は『經』文を直接御引用の場合は、曰の語を以てせられることが通例であるが、ここには「華嚴經偈云」と言つて、云の語を以てせられたことから『要集』に依られたことは明かである。しかし宗祖の內心には、生死海中の「教化衆生」「疑謗爲緣」について、この一偈の背景たる瞿波善知識の教說全體が關連して强く動いていたのでなかろうか。